

しあわせの歌をフォルテシシモで

徒川 ニナ

パトリオットは今日もおもちゃ箱のてっぺんから、出窓の向こう側に見える広い広い青空を眺めています。赤い軍服、黒い帽子、背中に背負ったマスケット銃。パトリオットは海の向こうの兵隊さんとまるきり同じ姿をしています。しかしパトリオットは平和を愛し、争いは好みません。

「お前、それでどうして兵隊なんかやっているんだ？」

シンバルを構えたチンパンジーのデインキーがそう問いかけます。

パトリオットは自慢げに胸を張って答えました。

「決まっている！ それはミサキを守るためさ！」

パトリオットは、自信をもってそう言うことのできる自分はなんて幸せ者なのだろうと思いました。

ミサキというのは、パトリオットやデインキーを所有している女の子の名前です。しかしミサキは『持ち主』という言葉があまり好きではないようです。

「パトリオットも、デインキーも、みんな私のともだちだもん!!」



ミサキが丸いほっぺたを膨らませながらお母さんにそう言っているのを聞いた時、パトリオットは一生をミサキのそばで過ごすことを誓いました。言葉にはださなくても、多分ディンキーも一緒です。このおもちゃ箱で眠っている金髪の人形エリザも、テイベアのトムも、みんなミサキのことが大好きでした。

「おい、そろそろ口を閉じておけよ。ミサキが目覚ます時間だ」
ディンキーがそう言って、いーっと歯を剥きだしにしました。パトリオットもそれにならって背筋を伸ばし、ただの人形になりすまします。

お着替えをすませてリビングにやってきたミサキは、ピンク色の可愛いワンピースを着ていました。パトリオットが今までに見たことのないその洋服は、きつとお母さんから新しく買ってもらったものでしょう。綻んだつぼみのようなピンクのひらひらも、舞い上がる綿毛にも似た白いふわふわも、ミサキにとってもよく似合っていて、まるで絵本の中のお姫様のようにです。パトリオットは、自分の顔がいつのまにか熱くなっているのを感じました。しかし慌てて心を落ち着け、平静を保ちます。

「早くユウタ君が来るといいわね」

お母さんがそう言ってミサキの頭を撫でました。ミサキはお日様のような笑顔でそれにこたえます。
ユウタ君。

その名前をパトリオットはよく知っています。同じマンションに住む、ミサキと同年の男の子です。よく部屋に遊びに来ては、パトリオットやディンキーたちと共に時間を過ごします。

ユウタ君も、パトリオットにとっては大事な友達の人です。しかし、ミサキがこんな風に可愛らしい洋服を着ているのはユウタ君の為なのだと思うと、寂しいような、悲しいような、なんともいえない気持ちになりました。

「おい、眉毛が下がってるぞ。らしくない」

隣にいたディンキーがごくごく小さい声で教えてくれたおかげで、パトリオットは再び凜々しい表情をつく

ることができました。

ミサキは結び上げた髪を揺らしながら、絵本のページをめくるのに夢中です。パトリオットはほっと胸を撫で下ろしました。

どうして僕は寂しくなったり、悲しくなったりしたんだろう？

パトリオットは一生涯命考えますが、答えは思い浮かびません。

頭を悩ませているうちに、リンゴーンと玄関の呼び鈴が鳴りました。

「ユウタ君だっ！」

ミサキは大きな声をあげると、駆け足で部屋を出ていきます。

パトリオットに聞こえるのは、嬉しそうにはしゃぐミサキとユウタ君の笑い声だけ。しかしそれでも、ミサキが今、はじけるような笑顔を浮かべているだろうことは簡単に想像できました。

ミサキが笑顔でいてくれるなら、それが自分の幸せであるとパトリオットは考えています。しかしそれではどうして胸の奥がずきずきと痛むのでしょうか。

パトリオットは、このところふしぎな胸の痛みに悩まされています。それもきまって、ミサキがユウタ君と遊んでいる時だけです。

やがてミサキとユウタ君がパトリオット達のいる部屋へやってきました。ミサキのやわい手が、ユウタ君の手をそっと握っているのを見て、やはりパトリオットの胸はずきずきと痛みます。

「きょうは何してあそぼうか」

ユウタ君がそう言って、おもちゃ箱の前に座りました。

「おままごとしようよ！ ユウタ君がお父さん、私がお母さんね！」

そう言ってミサキは、おもちゃ箱の中からキッチンセットと金髪のエリザを取り出しました。こういう時エリザはいつも娘の役ときまっています。やがてミサキは反対の手でパトリオットを抱きあげました。きっとお



兄さんの役でしょう。

「ほら、いいこいいこ」

ミサキの指先がエリザの髪を優しく撫でます。無表情を装っているエリザのほっぺたが、ほんの少しだけ赤くなっていることにパトリオットは気付いていました。帽子をかぶっていなかったら、あんな風に撫でてもらえるのだろうか。パトリオットもこの時ばかりは、格好よくきまった自分の姿を恨みます。

「ふたりともいいこね」

右手にエリザ、左手にパトリオット。二人の子供を抱えて、ミサキママはとても嬉しそうです。

嬉しいのは君だけじゃないよ、ミサキ。

パトリオットは高鳴る鼓動をおさえながら、懸命に心の中で話しかけます。

僕は、僕は君と一緒にいられると、こんなにも嬉しい！ 楽しい！ そしてとっても幸せだ！

「じゃあ、しごとについてくるね」

そうやってユウタ君が、首元でネクタイをしめる真似をしました。

「いってらっしゃい」

ミサキは微笑んで、二人の子供を抱いたままユウタ君に近付きます。

ミサキのまんまるな瞳が、パトリオットやエリザから逸れて、まっすぐにユウタ君を見つめています。そのことが、パトリオットの心をずきずきと痛めました。

「ママのいうことをきいて、いいこにしてるんだよ」

ユウタ君はそう言って、エリザの頭を撫でました。

パトリオットには、エリザが悲しいような、怒っているような、ふしぎな顔をしているのがわかります。なぜって、パトリオットもほとんど同じような気持ちだからです。

「いたずらばかりしてちゃだめだぞ」

ユウタ君の手が、パトリオットの右腕をそっと撫でました。

やめてくれ!! 僕に触れていいのは、ミサキだけだ!!

パトリオットの心がそう叫びます。しかし今日は、胸の奥が軋みながら悲鳴をあげる、ただそれだけでは終わりませんでした。

パキッという音がして、パトリオットの右腕が床に転げ落ちます。

木製の身体には神経がとおっていないので、痛みはありません。しかしこの時もパトリオットは、とにかく胸の辺りが痛くて痛くて、うっかりすると悲鳴をあげてしまっていました。

「あっ……!」

ミサキの大きな瞳がさらに大きく見開かれます。

ユウタ君はあわててパトリオットの右手を拾い、一生懸命くっつけようとしました。しかしどうやってもうまくいきません。腕と身体をついでいる部品が折れてしまったのです。

ミサキは大きな声をあげて泣き出しました。あわててミサキのお母さんがかけつけます。パトリオットの右 hand を見て、それが簡単には直りそうもないと悟ると、両方の眉毛をハの字にして困り果ててしまいました。

「うえーん!」

ミサキは泣きやみません。さらに激しい声をあげて泣きながら、ぼろぼろと涙をこぼします。

パトリオットは、悲しみのあまり途方にくれていました。右腕がとれてしまったからではありません。ミサキがこんな風に激しく泣きじゃくっていて、しかもその原因に自分が関わっていると思うと、悲しくて悲しくてしょうがないのです。

「ミサキちゃん、ごめんね……」



ユウタ君が涙でうるんだ瞳でミサキを見つめます。

しかしミサキは泣きやみません。ひっくひっくと泣きじゃくりながら、懸命に口を開こうとしています。

「ユウタ君が、こわした……っ!!」

「……………」

ユウタ君の瞳からも、ぼろりと一筋の涙がこぼれました。

「ユウタ君、きらいっ! もう遊ばないっ!!」

強い口調でそうなじった後、ミサキは更に激しく泣きはじめました。ユウタ君もぼろぼろと涙をこぼしています。お母さんは、ハンカチでユウタ君の目と鼻を優しく拭うと、「ごめんさいね」と謝っていました。

唇をきゅっと引き結んでなおもこみあげる涙をこらえると、ユウタ君はけんめいに笑顔をつくって、「ぼく、いちどお家にかえるね」と言いました。

「その子うでが直る方法、さがしてくる」

ユウタ君はそう言って、ミサキの家を飛び出しました。ミサキはさっきよりもいっそう大きな声で、滝のように涙を流しながら泣きじゃくります。

「大丈夫よ。またお父さんが買ってきてくれるから」

パトリオットは、お父さんが海外に出張に行った時のお土産でした。

「いや! 私はこの子がいいの!!」

駄々をこねるミサキに、お母さんも困り顔です。まったく同じものを手に入れるのはなかなか難しいということを知っていたのです。

ミサキに「この子がいいの」と言われた瞬間、パトリオットの心には一つの小さな火が灯りました。

それは悲しみに凍てついた心をあたためてくれましたが、やがてパトリオット自身を傷つけながらめらめら

と燃え上がります。

ミサキが選んだのは、ユウタ君でなければお母さんでもありません。パトリオットです。それなのに、焼き払われてがらんどうになった心はいっこうに満たされないので。

むしろパトリオットは、お腹の奥の奥の方に、ぽっかりと大きな穴があいてしまったような気がしました。喜びも悲しみも、全てがその穴にのみこまれて、しまいにはパトリオット自身もいなくなってしまおうような、恐ろしい心地です。

「――まったく、しょうがないわね」

お母さんはそう言うと、ミサキを抱き上げ、部屋の外へ出て行きました。きっとミサキの大好きな、甘いものや温かいもので気をひこうとしているのでしょう。部屋の中にはばらばらになったキッチンセットと、気まずそうに視線をさまよわせるディンキーとエリザ、そして右腕のとれたパトリオットが残されています。

「――おい、お前。それ、痛くないのかよ」

ディンキーがおずおずと口を開きました。

「腕がとれてしまっているわ。手術が必要かもしれない！」

エリザは青ざめた顔で叫びます。しかしパトリオットは決して声を荒げません。

「……そんなことは、どうだっていいんだ」

パトリオットはそう言って、よろよろと歩きだしました。右腕がないせいでバランスがうまくとれませんが、慣れればどうということはありません。

パトリオットは左手で外れてしまった右腕を拾い上げると、じっとそのつけ根の部分、肩と腕とをつないでいた部品の断面を見つめます。

ほんのついさっきまで、身体に異常はみられませんでした。

パトリオットには、右腕が外れてしまったのはユウタ君のせいではないということがわかっています。ユウ



タ君は、優しく優しく。パトリオットに触りました。そのせいで部品が割れて、腕がとれてしまうなんてこと、あるはずがないのです。

悲鳴をあげていたのはパトリオットの心でした。そしてパトリオットは願ってしまったのです。

『ミサキが自分だけを見ればいいのに』

『ミサキがユウタ君を嫌いになればいいのに』

それはどろどろとした、気持ちの悪い欲望でした。しかも粘り気があって、一度触れてしまうとなかなか引き剥がすことができません。

パトリオットの心は『どろどろねばねば』に負けました。

その結果部品が割れ、無残にも右腕がもげてしまったのです。

パトリオットは外れてしまった右腕を見つめながら、一生懸命考えました。

悲しみのふちからミサキを救い出したい。その為に自分に何ができるか、パトリオットは必死で知恵を振り絞ります。

やがてパトリオットの頭には、一つの名案が浮かびました。

「……エリザ！ 君の髪を結んでいる、そのリボンを貸してくれないか？」

はっとしたような表情で言うパトリオットに、エリザは目を剥いて首を傾げます。

「いいけど、そんなものどうするの？」

パトリオットは、自分のもげた右腕をエリザに向かって差し出しました。

「反対のわきの下にリボンをとおして、右腕を身体にくくりつけてくれ。そうしたらかなり楽になるから」

エリザとディンキーは、驚いて顔を見合わせます。

「そんなことしたって、何の解決にもなりはしないぞ？」

口をへの字に曲げながらそう言うディンキーに、パトリオットは首を振りしました。

「僕がしたいのは『解決』じゃない」

にっこりと笑いながらパトリオットは続けます。

「やっと思い出したんだ。気持ちを伝える為の一番いい方法をね」

エリザの手によって、パトリオットの右腕はその身体にぴったりとくくりつけられました。重要なのは、安定した姿勢を保つことです。それができなければ、この儀式にふさわしい、美しく伸びやかな声をだすことはできません。

パトリオットのやりたいことに合点がいったディンキーたちは、にやりといたずらっ子のように笑いながら言いました。

「そうだとわかったら、手を貸さないわけにはいかないな」

「ショータイムの始まりね！」

エリザのウインクを合図に、おもちゃ箱の中からも、ぞろぞろとみんなが顔を出します。

テディベアのトム、パイロットのジョー、そして今にもとろけそうなチーズがチャームポイントのハンバーガーボーイ。

ある者は大きく肩をいからせ、ある者はぐるぐると腕をまわし、まるで自分たちの出番を待ち構えているようです。

「みんな……」

パトリオットは呆然として呟きました。

ミサキをあんな風に悲しませたのは自分で、だからこそこの儀式は自分一人で成し遂げなくてはならない。パトリオットは当然のようにそう思っていました。

しかしディンキーは照れ臭そうに鼻の下を擦りながら言います。

「水臭いな。俺達『家族』だろ」



パトリオットは、木片でできた自分の鼻の奥がツンと痛むのを感じました。そしてこみあげてきた涙をこらえながら、みんなに向かって礼をします。

「……ありがとう……！」

そんなパトリオットを見て、ディンキーはけらけら笑いしました。

「なんだよ、そんな大げさな。随分と他人行儀だなあ」

おどけた様子で言うディンキーにつられて、みんなもいっせいに笑いだします。パトリオットは心の底から自分の『家族』に感謝しました。

コホン、と咳払いをしてから、パトリオットは大きく声を張り上げます。

「よし、それじゃ始めよう！」

パトリオットの一声で、みんなはいっせいに動き始めました。

ディンキーはいつにもまして歯ぐきを剥き出しにしながら、気合いをいれてシンバルを構えます。小さな小さなおもちゃのピアノの前に座っているのはエリザ。パイロットのジョーは自慢のセスナのエンジンをふかし、トムの毛むくじやらな手は、並べられた積み木を軽快に叩いています。

「ウーン、腕がなるぜえ!!」

そう声をあげるハンバーガーボーイには腕がありません。ただ、お腹につまった空気が脳天の穴から抜けて、プウという音をたてました。

たくさん泣いて疲れはてたミサキは、ココアを飲みほすとリビングのソファの上で眠ってしまったのが常です。やがてお母さんは、ミサキをこの部屋にある彼女のベッドに寝かせにやってくるでしょう。その時が勝負です。

「——みんな、準備はいいかい？」

パトリオットの言葉に全員が頷きました。

少しずつ近づいてくる大人の足音に、パトリオット達はいっせいに息をひそめます。お母さんは部屋の戸を

開けると、腕の中で眠るミサキを起こさないように、そっとベッドに横たえました。

「……」

お母さんの視線が、雑然と散らかっているおもちゃ達に注がれます。パトリオットの背中には、鋭い緊張がはしりました。

しかし、物音をたてたらミサキを起こしてしまうと思ったのか、お母さんはおもちゃたちを片付けることなく、ミサキの部屋を後にします。

「……ヨシッ」

ハンバーガーボーイが吐息まじりにプピッと音をたてました。

この家の全てのおもちゃたちによる、『しあわせの歌大作戦』のスタートです。

エリザの細い指が滑らかに鍵盤をたたきます。つむぎだされるメロディは、おもちゃたちにも、そしてミサキにも、大変なじみ深いものでした。ミサキが赤ちゃんの頃から、お母さんが歌ってくれた子守歌。ただし歌詞が違います。

『泣かないで 泣かないで 君は僕の大切な友達』

パトリオットは、お腹の底から精一杯声をあげて、ろうろうと歌い始めました。

トムの奏でるパーカッションの音色が、小気味よく響きながらパトリオットたちの間を駆け抜けていきます。ブーン、ブーンと腹の底に響くセスナのエンジン音は、軽快なメロディをより味わい深いものにしてくれました。

『いつまでも 笑っていて 君はぼくの太陽』

プピ、プピ、プピ、というハンバーガーボーイの声がアクセントになります。

やがて少しずつ、旋律は明るく、華やかになっていきました。

セスナの運転席で、ジョーがどこからか取り出したラップをププーと奏でます。



『僕たちは 君が大好き ずっとずっと そばにいるよ』

エリザの高い声と、ディンキーの低い声がコーラスとして加わってきました。

パトリオットが『大好き』といえば二人も『大好き』と言い、パトリオットが『そばにいるよ』とさえ二人も『そばにいるよ』と言いました。トムもビブラートをきかせたハミングでそれに続きます。

少しづつ少しづつ、歌声が重なりながら大きくなっていききました。旋律にのった思いはひとつだけ。

『ミサキ、大好き！ ずっとずっと、大好き！』

シャーン、というシンバルの音とともに、パトリオット達のコンサートは終演を迎えました。

「う、ん……」

小さな声と共に、ミサキの白くてまるい臉が震えます。

「大変だ！ みんな、気をつけっ!!」

ディンキーのかけ声で、みんなが慌ただしく『ただのおもちゃ』に戻っていききました。

「んー……？」

不思議そうな顔をしているミサキに、パトリオットたちの思いは届いたのでしょうか？

ミサキはベッドから降りると、おもちゃ箱のそばにゆっくりと歩み寄ってきます。

ぺたん、と床に座り込んだミサキは、パトリオットへと手を伸ばし、そして目を見開きました。

外れてしまった右腕を支えているぐるぐる巻きのリボン。傍らにはポニーテールをほどいたエリザがそっと寄り添っています。

二人の表情は穏やかでした。まるでミサキに向かって微笑みかけているようにも見えます。

ミサキは、結ばれているリボンがゆるまないように、そっとそっとパトリオットを抱き上げました。

「……ごめんね」

ミサキの小さな呟きに、パトリオットは込みあげてきた涙をぐっとこらえます。

そして、その言葉が決して伝わることがないと知っていても、心の声で彼女に答えずにはいられませんでした。

『ごめんね、ミサキ。僕の方こそごめん』

喉の奥から絶え間なく湧き上がる思いを、パトリオットは声にならない声で叫びます。

『僕はね、気付いたんだ。ミサキの笑顔が、幸せが、僕の幸せなんだって！』

ミサキには、パトリオットの内なる声を聞くことはできません。

しかしそれでも、まるであいづちのように、彼女はにっこり笑います。

それだけでパトリオットは、もう十二分に幸せでした。

「あら、起きてたの」

お母さんがそう言って、ミサキの部屋に入ってきました。

やわらかい微笑みと共に差し出された右手には、電話の子機が握られています。

「ユウタ君から電話よ。……どうする？」

ミサキは両目を真ん丸に見開いた後、少し考えてからパトリオットをゆっくりと床に寝かせました。

「電話、でる！」

ぱたぱたという軽やかな音と共に、ミサキは部屋を出て行きました。

その瞬間に見たはじけるような笑顔は、パトリオットやディンキー、そして全てのおもちゃ達を、あたたかい気持ちで満たしてくれます。

扉の向こうから聞こえてくるミサキの明るい声を聞きながら、パトリオット達は胸にこみ上げる喜びを噛みしめていました。



今宵ミサキが寝静まった後、この部屋では作戦の成功を祝うコンサートが始まることでしょう。これを読んでいる貴方の部屋で、もしもおもちゃ達の囁き声が聞こえたら、それは合図かもしれません。ぜひ、よくよく耳をすましてみてください。いつも遊んでいるあの子やこの子が、貴方の為に歌ってくれているかもしれませんよ。